天神原遺跡[4]は上毛三山の一つ妙義山の東方約10㎞の河岸段丘上に位置します。ここには中期末葉～後期前葉にかけて集落が形成されています。しかし、後期中葉～後葉にかけて配石墓群が形成されるようになり、遺跡の性格が大きく変容します。この時期になると配石墓群のほか、立石を伴う眼鏡状配石遺構と方形配石遺構が構築され、墓域としてだけではなく儀礼・祭祀の場としても利用されるようになります。晩期前葉になると墓域として埋設土器群が形成されるとともに、後期の配石墓群[5]の上に環状列石（環状積石）が形成され、石棒祭祀遺構も構築されるなど祭祀の場としての性格がいっそう強まります。当期には環状列石の西端部に3本の立石を伴う祭壇状遺構[6]が構築されます。この立石は西方にそびえ立つ奇峰妙義山の三つ峰に対応しています。そして、春分・秋分には中心峰金洞山に日が沈み、南西に方向に存在する神奈備型の大桁山には冬至に日が沈む光景が観測できます。ちなみに、ここからは妙義山の上にもうひとつヤマが出現する磯部蜃気楼現象も観測することができます。縄文人にとって、妙義山は天上のアノ世を意識させる神秘的なヤマとして認識されていたようです。

天神原遺跡春分日没

天神原遺跡春分日没

天神原遺跡と妙義山

後期の配石墓群

妙義山に向かって立てられた3本の立石

科学の目で見る　**第1回　西田泰民さん**

火炎土器と科学分析（1）

火炎土器には口縁の装飾の違いにより火焔型土器と王冠型土器の2種類があり、いずれも縁から大きく上方に張り出した突起がついています。ところがその突起の裏側にはしばしば炭化物の付着が残っています。これはかなり粘り気の強い調理物が吹きあがった結果と推定されます。また火炎土器のような過度に装飾された土器とともに、縄文だけが施された単純な装飾の深鉢も多数出土していますが、こちらの方にはあまり炭化物が残っていません。炭化物が観察される割合からみると、火炎土器の方が縄文だけの土器よりもしばしば火にかけられているように見えるほどです。

直接火にかけていなくても、土器が囲炉裏の上方に保管されていたとすれば、燻されて煤けたでしょう。しかし、火炎土器の炭化物は、明らかに煤ではなく、調理物に由来するオコゲと考えられます。理由のひとつは、土器の外側には炭化物がほとんどみられないことがあります。もうひとつは炭化物の化学成分を分析すると、多くのバリエーションが見られ、様々な食材を調理したことを推定できる点にあります。

オコゲのついた火焔型土器
（笹山遺跡出土十日市教育委員会所蔵）

お知らせ　**新年度会費納入のお願い**

ジョーモネスクジャパンでは会員の皆様に新年度会費納入をお願いしております。今年度より会費は銀行振込とさせていただきます。お手数ですが、下記口座にお振込いただけますようお願い申し上げます。

北越銀行　本店　普通　2001222　NPO法人ジョーモネスクジャパン

年会費は一般会員2,000円、協賛会員1口10,000円（1口以上でお願い致します。）

（誠に恐縮ですが振込手数料はご負担いただけますようお願い申し上げます。）

NPO法人 ジョーモネスクジャパン　代表 小林達雄

代表事務所：〒940-0065　新潟県長岡市坂之上町2−1−1　長岡商工会議所内　TEL 0258-32-4500・FAX 0258-34-4500

第2事務所：〒949-5401　新潟県長岡市飯島138−2　TEL 0258-92-3198

東京連絡所：〒174-0064　東京都板橋区中台1−47−3　TEL 03-3936-9956・FAX 03-5399-3244

http://www.jomonesque-japan.net

2012年5月　日発行　編集：有限会社 アルケーリサーチ　印刷：有限会社 平電子印刷所

JOMONESQUE JAPAN

ジョーモネスクジャパン

Jomonesque Japan

vol.3

Essay

縄文環状貝塚から瓦礫記念塔建立まで（前編）

連　載

縄文土器十選　（今福利恵）

石 stone tools　（堤　隆）

縄文ランドスケープ　（大工原豊）

Essay

縄文環状貝塚から瓦礫記念塔建立まで（前編）

NPO 法人　ジョーモネスクジャパン理事長　小　林　達　雄

日本列島を舞台とする歴史に、最初にして最大級の異変が現れた。15,000年ほど前の縄文革命、旧石器時代文化に続く新時代の幕開けである。

土器をはじめ、弓矢、犬の飼育など新規の道具や技術が次々と登場した。そして何よりも長い遊動的生活から定住的なムラを営むに至ったことが重要である。縄文文化形成の体勢が整えられ、順調な歩みがはじまったのだ。ところが、やがて全く予期しなかった事態がその水面下で進行しつつあった。気がついたら、そこかしこにゴミが溜って生活の場がおびやかされるようになったのである。人類が初めて経験したゴミ問題の勃発だ。

一ヶ所に滞在することなく、転々とキャンプ地を移り住んでいた旧石器時代には、ゴミも少なく、その場に置き去りにしておきさえすれば、忽ち腐食分解して跡かたもなくなるが、定住生活ではそうはいかない。ゴミは分解速度を越えて溜まる一方で、「チリも積もれば山となる」。あまつさえ毎日の食事に伴う、いわゆる台所ゴミは悪臭で鼻もちならない。アメリカ先住民のアリカラ族では、まず身分階層の上位グループは風上に陣取ってしのいだが、風下に追いやられた多数派はたまったもんじゃない。ことほど左様に縄文人の苦労が忍ばれるというものだ。これに輪をかけて、貝類を捕食していた海岸のムラでは、連日排出されるそれらの貝殻は、自らのカルシュウム分に保護されて、分解を免がれ、形をとどめたままで嵩ばる一方である。しかも内陸部への交易品としての干貝加工が盛んとなるにつれ、まさに産業廃棄物であふれ返らんばかりである。

縄文人は、勿論たまる貝殻を舌打ちしながらただ横目で睨んでいたわけでは決してない。取り敢えずムラの端っこの斜面に投げ捨てて当面の場をしのいだ。それが考古学で言うところの斜面貝塚である。続いて、事情があって住まなくなって廃棄された竪穴住居の窪みが格好な捨て場とされた。ムラのそこかしこに点在する地点貝塚がそれである。　ムラの定住生活が軌道にのるにつれ、その程度の応急処理では早晩臨界に達するのも蓋し当然のなりゆきである。ところがこの期に及んでついに縄文人は思案投げ首に終止符を打ち、ものの見事に難局をしのぎ切る手立てに成功したのである。

つまり、厄介物の貝殻を逆手にとり、むしろ積極的に掻き集めてはムラの周囲をぐるり取り巻くドーナツ状の土手を築きはじめたのだ。記念物モニュメントとしての環状貝塚である。かくて、食料残滓物は単なるゴミから一転、記念物造営の建設資材となった。しかも、ムラ生活が続く限り、資材の供給も途絶えることはない。居ながらにして土手は着々と円い形を現し、高くなって紛れもない堂々たる白い記念物に仕上がってゆく。もはや多少の臭気はものともせず、記念物造営を目指す高邁な志の影に隠れて文句なしだ。

この偉業は、縄文中期に東京湾岸で始まり、直径200メートルを越えるほどに発展した。縄文文化が誇る世界的遺産である。似たものは北アメリカ東海岸の南カロライナにも見られ、The Sewee Shell Ring（環状貝塚）はその典型であるが、土手も低く、縄文の規模には抗すべくもない。

環状貝塚の成立は、内陸部にも影響を与え、環状の土盛りモニュメント＝円形土手の造成を促した。栃木県小山市寺野東遺跡がその代表格である。直径約165メートルともなれば、その土量もばかにならない。貝塚地帯のように食べかすの貝殻がない分だけ、全て土を運んで盛り上げねばならないので、ムラの中央を掘りくぼめながら賄うこととなった。約5メートルの高低差をもつ土手はこうして地上に姿をはっきりと現したのである。シャベルなどの道具をもたず、尖った棒の先などで土を突きほぐしては掌で掬い、モッコや笊で運ぶしかないのだから、手間暇のかかること夥しい。一朝一夕では到底適わぬ相談だ。

土手の内部には工事中に使用されていた土器が混入していて、下低部から上方へと進行するのにつれて、縄文後期の初めから後期終末を経て晩期前半まで、ざっと十段階以上の土器型式が連綿と続いていることが見てとれる。つまり一型式の存続期間がおおよそ百年見当とすれば、千年以上の長年月に亘って造営が間断なく継続されていた事実を物語っている。記念物には、他に環状列石ストーンサークルや巨木柱列などがあり、いずれも規模が大きく、目立つものである。それだけに長年月をかけ、膨大な労力が投入される。そのくせ日常的な衣食住に直接かかわる素振りが全く見えない。少なくとも我々現代人がいかにためつすがめつしても腹の足しになるものではなかった。しかし、縄文人といえども、100パーセントの骨折り損でよしとしたわけでもあるまい。つまり、現代人の思考を越えて、縄文人には他を以って代えることの出来ないほどの大いなる心の足しを得たものとみなくてはならない。

そうした記念物を、ゴミの有効利用によって実現したのだ。縄文人に乾杯！

縄文土器十選　第1回　今福利恵さん

○水煙文土器　安道寺遺跡　山梨県甲州市塩山下粟生野　中期　曽利式土器　山梨県立考古博物館
○人物像のある有孔鍔付土器　鋳物師屋遺跡　山梨県南アルプス市下市ノ瀬　中期　勝坂式土器　南アルプス市教育委員会
○四人の踊る人物像土器　一の沢西遺跡　山梨県笛吹市境川町　中期　勝坂式土器　山梨県立考古博物館
○出産土器　津金御所前遺跡　山梨県北杜市須玉町　中期　勝坂式土器　北杜市教育委員会
○重弧文土器　殿林遺跡　山梨県甲州市塩山上萩原　中期　曽利式土器　山梨県立考古博物館
○動物装飾付釣手土器　札沢遺跡　長野県諏訪郡富士見町　中期　勝坂式土器　長野県立歴史館
○神像筒形土器　藤内遺跡　長野県諏訪郡富士見町　中期　勝坂式土器　井戸尻考古館
○顔面把手付深鉢形土器　海戸遺跡　長野県岡谷市小尾口
○蛇体把手付深鉢　尖石遺跡　長野県茅野市豊平　中期　勝坂式土器　尖石縄文考古館
○火焔土器　馬高遺跡　新潟県長岡市関原町　中期　火炎土器　馬高縄文館

水煙文土器

水煙文土器は中部高地にみられる中期土器で安道寺遺跡のものはその代表格。口縁部からダイナミックに立ち上がる大きな把手は渦巻く水煙を思い起こさせます。曽利式土器の初期にしかみられず、ごく短期間にいろいろなバリエーションをみせています。特にこの土器は、多重円文を波状文で飾る四つの大型把手を立体的に器体から立ち上がらせており、高さ82cmの砲弾のような巨体は見るものを圧倒します。胴体にはこの把手から垂下する腕骨状のJ字形隆帯を連結させています。把手の間にある無文の空間と胴体の細かな縦位条線地紋はこうした文様をことさら強調しています。住居内の土坑に、他の小型土器を取り囲むように打ち割られて埋設されていました。この土器には儀礼に使われ最後まで特別な意味が込められていたと思われます。

石 stone tools　第1回　堤　隆さん

神子柴　ー縄文の暁を告げるミステリー

諏訪湖から流れ出た天竜川が中央を貫き、南アルプスの美しい山稜を望む信州伊那谷、その一角で今から半世紀ほど前、1958年9月に地元の中学校教諭で地域の考古学研究者でもある林茂樹の情熱を傾けた調査によって発見されたのが神子柴遺跡だ。早くもその年の11月には、発掘調査のメスが入った。

発掘が始まると、7×3mの範囲から石器がまとまって見つかった。通常、遺跡における石器分布は、何十メートルにも連綿と広がることがあるので、神子柴の場合、きわめて狭い範囲に石器が集中していたといえる。

出土した石器は、刃を磨いた局部磨製石斧9点、刃が磨かれていない打製石斧9点、尖頭器18点、掻器11点、削器8点、敲石2点、砥石2点、総数87点であった。石斧の中には20センチメートルを超す大型品8点があり、一方で10センチ前後の小型品もみられた。尖頭器ともいわれる石槍は、木の葉形に仕上げられた石器で、10センチメートルを超す大型品12点がみられた。掻器・削器は切削用の工具、敲石は石器製作用のハンマー、砥石は石斧の刃を磨くためのものである。

考古学者藤森栄一が「日本一の石槍」と呼んだ美しい石槍の数々、そして磨きあげた刃をもちずっしりと重量感のある石斧、その他いずれもため息がでるような見事な石器ばかりで構成される神子柴は、今日、その歴史的意義から全点が国重要文化財としての指定を受けている。

神子柴を、旧石器時代の最終末とする見方もあるが、むしろ縄文の暁を告げる石器群とみる研究者が多い。

そして発掘当初から、神子柴は謎めいた存在であった。こうした見事な石槍や石斧類は、祭器、マツリのための道具や、威信財、つまり財力を誇示する非実用品ではないかとする意見がある。一方、あくまで実用品であるとする主張も根強い。

パプア・ニューギニアのワギ谷・チムブ谷の人々が使う石斧には、「日常の斧」・「祭りの斧」・「花嫁代償の斧」の三者があり、現地語でもこれらが呼び分けられているとされる。日常の斧は、屋外作業など日常の仕事で使われ、祭りの斧はあらゆる種類の祭り・儀式・戦闘・訪問などに使われ「見せびらかされるもの」で、花嫁代償の斧は、花婿側から花嫁側のイエに代償として贈られるものであるという。こうした日常と非日常の斧の間には、大小のサイズ差があるらしい。

実際、神子柴の小型の石斧には、激しい使用によって刃が折れた形跡のあるものがあった。一方で、大型の石斧は未使用のものと考えられた。パプア・ニューギニアの事例のような実用と非実用の棲み分けが、神子柴にもあったのかもしれない。

また、神子柴の石器のほとんどが、割れたり折れたりしていない見事な完形品であったことに大きな問題が残る。通常、これからが使用本番という大切なツールを置き去りにする人間はいない。ようやく手に入れたあこがれのスマートフォンを、無意味に捨ててしまうことなどあり得ないのと同じだ。なぜ、神子柴には、日本一とまで折り紙がつく、すばらしい石器ばかりが残されたのか。

忘れていった、などという間抜けな説明は入り込む余地がない。あえてこの場所に残していったのである。

墓の副葬品、儀式の場、財産隠匿の場、流通製品のストックの場、オーソドックスな見解では住居など、いくつかの説明が考古学者によってなされてきた。しかし、発掘から半世紀を経た今も決着がつかないミステリーが神子柴なのである。

あなたもこの謎解きに一度挑戦してみてはいかがだろうか。

神子柴遺跡の発掘調査

出土した石槍

神子柴遺跡の主要石器

縄文ランドスケープ　第1回　大工原豊さん

天神原遺跡

時　　期：中期末葉（加曽利E4式期）～晩期前葉（天神原＝安行3c式期）
所　在　地：群馬県安中市中野谷字天神原地内
緯度・経度：36°17’13”　138°51’28”（測地系Tokyo）
撮　影　日：1995年12月22日（冬至）❶ 1996年3月27日（春分）❷、
　　1998年3月18日（春分）❸
方　　角：妙義山（金洞山）N-90-W　大桁山 S-34-W

天神原遺跡冬至日没